

本号のテーマ：「読むこと」

「だるまちゃん」シリーズや「からすのパンやさん」などの絵本で知られる、作家加古里子（かこ さとし）さんが今年5月に亡くなりました。92歳でした。

加古さんの絵本は、愛情にあふれて温かく、絵もユーモアがあって魅力的です。生涯現役で600点余りのたくさんの作品を残されて、どれも知らず知らずのうちに大切なことを学べる作品です。何度読んでもおもしろいので、子どもたちが小さい時には繰り返し図書館から借りてきました。子どもと一緒に読んだ絵本の思い出はかけがえのないものです。ぜひ暑い夏に涼しい図書館で、加古作品の楽しさにふれてみてはいかがでしょうか。



また、佐久市の図書館には、決して減ることのない増える一方の夢の様な通帳があります。その名は「読書通帳」。借りた本の名前と年月日が印字でき、自分の読書歴が残せます。1冊300円ですが、市内に住所登録のある中学生以下の皆さんは無料です。金融機関のATMと同じような機械で記帳します。この作業が楽しくて人気！目に見える形で増えていくので、達成感を感じることもできます。自分が小さい時に読んでもらった本を、将来、自分の子どもに読んであげることが出来ますね。読書通帳を利用してたくさん本を読んで、心や知識の財産を増やして下さい。

佐久市では「読むこと」「書くこと」「行うこと」（コスモスプラン）を大切にしています。これは佐久の先人の一人「丸岡秀子さん」の思慕碑に刻まれている言葉です。丸岡さんは農村女性の解放に生涯をささげ、「読めなかったら新聞の見出しだけでも読む。気づいたことを自分の言葉で書き留める。書いたことに責任をもち実行する。」と多くの人に語りかけました。時代は変わり世の中の環境が大きく変化しても、大切なことは変わらないと、丸岡さんに教えられます。

「教育委員会の動きなど」

1 舞台芸術に子どもたちの歓声

今年も「キッズ・サーキット in 佐久」が楽しく開催されました。8月3日から3日間、佐久市の7施設でサーカス・人形劇・ミュージカル・伝統芸能など全23公演、盛りだくさんな内容でした。

「わんぱく寄席」では、寄席の楽しさを分かりやすく教えてもらい、そばのすすり方や寄席太鼓の叩き方など、参加型のステージで子どもたちの元気な声が響きました。千客万来の願いがこもった寄席文字の話など、大人も「へえー」とうなる興味深いものでした。落語・太神楽・紙切り、プロのステージに笑ったりハラハラしたり、楽しかった！

舞台芸術でたくさんの笑顔の花が咲いた、佐久の夏。多くの子どもたちが家族や友達と一緒に、生の舞台のエネルギーを感じ、心を動かした経験は素晴らしい時間です。出演者の皆様、ありがとうございました。また来年も楽しみです。

2 海外研修に胸を膨らませ

「佐久市ふるさと創生人材育成事業 中学生海外研修」、今年はエストニア共和国に8名、モンゴル国に7名が参加しました。事前研修を積み重ね、出発前の壮行会では、研修にかける思いを堂々と発表しました。

「コミュニケーション能力を高め、将来の夢へつなげたい。」

「ALT（外国語指導助手）の先生から外国の文化の違いを教えてもらい、面白く感じた。知らないものを体験したい。」

「異文化を感じて、日本という国を見直したい。その体験が自分の未来を変えてくれたらいい。」

「日本とエストニアの両方の良さを伝えられる存在になりたい。」

「親に読んでもらった『スーホの白い馬』、その世界を自分の目で見てみたい。」



研修日程は7月30日から7泊8日、エストニア共和国は学校訪問、モンゴル国は遊牧民宅ホームステイなどが予定されています。実り多い研修となることを願い、帰国後の報告会を楽しみにしています。